

メッセージアウトライン

ローマ14：7～12「生きるにも、死ぬにも」

[7-8]「私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです」

ここに信仰者は自己中心に生きるのではなく、キリストのために生き、そして死ぬという生涯の目標がはっきりと表わされている。

[9]「キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです」

キリストはその十字架の死により私たちの罪を贖ってくださった。だれでもこのお方を自分の救い主と信じる者は救われる。そして、さらに、キリストは死なれることによって、死者たちの世界でも主となられ、また、死よりよみがえられて、生きている者にとっても主となられた。→黙示録1：17～18 キリストはその死と復活によって、死んだ者と生きている者との主となり、支配者となられたのである。→ピリピ2：6～11

[10]「それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです」

私たちの主であり、さばき主であるお方は主イエス・キリストのみである。それなのに、まるで自分がさばき主や主人であるかのように、他のクリスチャンをさばいたり侮ったりするのはいったいどういうことかとパウロは言う。教会の中にはこのような問題があり、それは初代教会も今日の教会も同様なのである。イエス・キリストのみが主であるゆえに、クリスチャンはお互いにさばき合わないよう気をつけなければならない。やがて私たちは全員、神のさばきの座に立つときが来る。ここで言われている「さばき」とは、救われるか、滅びるかということではなく、私たちクリスチャンが地上で生きていた時になしたすべての行為に関するさばきのこと。

[11-12]「次のように書かれているからです。『主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる』こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きをすることになります」

11節はイザヤ45：23からの引用。主なる神のみが、まことのさばき主である。主は生きておられ、私たちの行動、語ることば、心の思いすべてを見ておられる。やがて世の終わりのさばきの時には、主イエスを信じる者は滅びに行くことはないが、各自、地上で歩んできたその行いについて神の御前に申し開きをし、報いを与えられることになる。

→マタイ12：36、25：1～30

それゆえに私たちは、人をさばいたり、侮ったりするのではなく、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬという生き方を目標として、この地上の歩みを進めていかなければならない。